

学位論文題名

『続古事談』研究

－『続古事談』諸本の親疎関係－

学位論文内容の要旨

本論文は鎌倉時代初期の説話集『続古事談』の諸本の本文を比較してその祖形に遡及することを目的としている。

本論文は、1 双立異文数からの諸本の関係の推定、2 相互異文数からの諸本の関係の推定、の2章、(1) 三手文庫本と明倫館本との書承の関係の推定、(2) 三手文庫本の系統類別の推定、(3) 教林文庫本の系統類別の推定、の3付説及び校本からなり、総字数約250000字である。

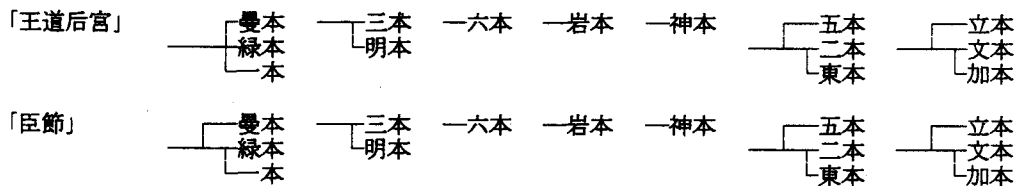
本論文で扱う諸本は、曼本(曼珠院旧蔵本)・緑本(河野信一記念館緑猗書庫旧蔵本)・一本(名古屋大学一冊本)・三本(上賀茂別雷神社三手文庫本)・明本(山口図書館明倫館旧蔵本)・六本(名古屋大学6冊本)・岩本(東洋文庫岩崎文庫本)・神本(神宮文庫本)・五本(名古屋大学5冊本)・二本(名古屋大学2冊本)・東本(東京教育大学本)・立本(立命館大学本)・文本(東京大学文化8年奥書本)・加本(都立中央図書館加賀文庫本)・教本(早稲田大学教林文庫旧蔵本)の15本である。

『続古事談』は「王道后宮」「臣節」「神社仏寺」「諸道」「漢朝」の5部立てからなる(諸本により、5巻・6巻(巻3欠)・6巻(臣節を2巻に分ける)と巻立ては異なる)。上記15本のうち教本は「王道后宮」「臣節」のみなので、これを除き14本の各部の諸本対立を見て行くと

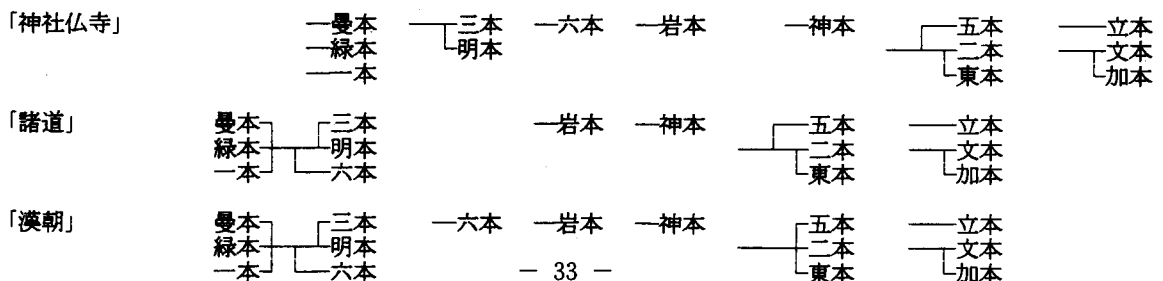
「王道后宮」「臣節」では

			王道后宮	臣節
曼本・緑本・一本・三本・明本・	六本・岩本・神本・五本・二本・東本	⇔ 立本・文本・加本	53例	69例
曼本・緑本・一本・三本・明本・	六本・岩本・神本・五本・二本・東本・立本	⇔ 文本・加本	18例	24例
三本・明本 ⇔ 曼本・緑本・一本・六本・岩本・神本・五本・二本・東本・	立本・文本・加本		36例	43例
曼本・緑本・一本・三本・明本・	六本・岩本・神本・立本・文本・加本	⇔ 五本・二本・東本	16例	22例
曼本・緑本・一本・三本・明本・	六本・岩本・神本・立本・文本・加本・五本	⇔ 二本・東本	36例	61例
曼本・緑本・一本 ⇔ 三本・明本・六本・岩本・神本・五本・二本・東本・	立本・文本・加本		13例	32例

の対立が顕著であり、以下のような小群に分類される。



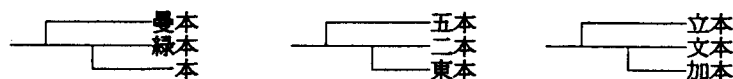
以下、同様にして各部ごとに



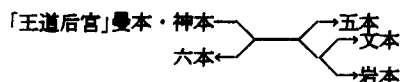
となる。

三本・明本は「諸道」「漢朝」では曼本等に近い関係を示すが、「王道后宮」「臣節」「神社仏寺」ではその兆候がみられず、立本も「王道后宮」「臣節」では文本・加本に近いが「神社仏寺」「諸道」「漢朝」ではそれが判然としないところから、三本・明本及び立本の本文に混交があると判断できる。

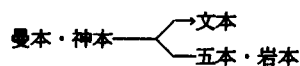
以上の状況から、全体の系統関係を予測するのは容易でないが、次のような部分的な系統関係は確認できる。



各部ごとに、曼本・六本・五本・神本・文本・岩本の6本の対立関係は



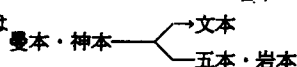
「臣節」 曼本・六本 ⇔ 五本・文本・岩本・神本 又は



「神社仏寺」 曼本・五本
六本
文本・岩本・神本

又は
曼本・五本
文本
岩本・神本

「諸道」 曼本・六本 ⇔ 五本・文本・岩本・神本 又は

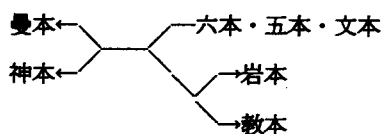


又は 六本・五本
文本
岩本・神本

「漢朝」は異文の数が多いので推定困難

部によって「曼本・神本 対 他の諸本」「曼本・六本 対 他の諸本」「曼本・五本 対 他の諸本」という矛盾する対立が現れ、書写の複層性が予想される。

教本を加えて、「王道后宮」「臣節」の7本の関係は



となろう。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宮 澤 俊 雅

副 査 教 授 富 田 康 之

副 査 助 教 佐 藤 知 己

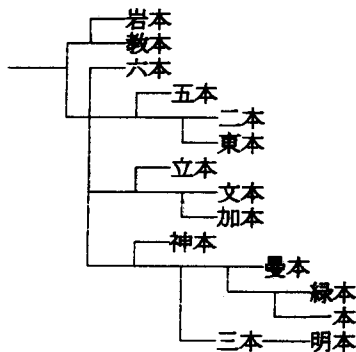
学 位 論 文 題 名

『続古事談』研究

－『続古事談』諸本の親疎関係－

『続古事談』の諸本についての先行研究は、系統的書承を考究するには至っていない(木下實一(1994)は「神本と岩本手が入り独自の様相を見せている」とし、播磨光寿(2000)は「臣節」の配列・構成から6巻5部立て(大本が該当する)を祖形と推論している。)

本論文でも諸本の系統関係を完全に確立するまでに至っていないが、親疎関係は相当に明確になっており、今後慎重に祖形との接点を索求し、設定しさえすれば、本文の遡源も大幅に進むであろう。今、仮に岩本・教本のあたりに祖形の接点を設定すれば、下のような系統関係(イメージ)を想定できるのである。



この他にも、付説の形で、以下のような事項を堅実に論証している。

- 1 山口図書館明倫館旧蔵本は山口藩が今井似閑蔵書(現三手文庫本)を書写したものと伝えられているが、『続古事談』の明本と三本の異同を比較検討して、明本が三本を書写したことを明らかにしている。
- 2 三本の書き入れの異文の多くは曼本・緑本・一本の本文と一致し、また書き入れの少ない「神社仏寺」以降では曼本・緑本・一本の3本にだけ共通する異文が比較的少ないことから、三本の本文が混交本文であることを明らかにしている。
- 3 教本の存する「王道后宮」「臣節」について、教本・岩本・六本・五本・神本の5本の異文分布を検討して、「教本・岩本 ⇔ 六本・五本・神本」の対立を明らかにしている。

本論文は『続古事談』の諸本の親疎関係をほぼ確定し、善本文への遡源を可能にしておき、今後、『続古事談』の本文研究の基礎となるべき成果を挙げている。この意味で本論文は『続古事談』研究・説話史研究を進展させるものである。審査担当者は全員一致して舛屋真由美氏に博士(文学)の学位を授与するのが至当であるとの結論に達した。